

2015 年度理論言語講座概要

① 生成文法Ⅰ ヒトのことばの不思議をめぐって

(月曜日 1 限・午後 6:00～7:30) 通年 <生成文法入門>

池内 正幸 (津田塾大学教授)

【講義概要】

生成文法に関心はあるがちょっと難しくて敷居が高いかなと思われている方、また、英語、日本語などいろんな言語にとっても興味があるけれども従来型の文法記述では飽き足らないと思われている方、あるいは、生成文法のいろんな術語は知っているがそれらは一体何のためなのか、背景にある基本的概念や思考法は何だろうと思われている方、そういう方には、本コースはまずもってうってつけのコースです。

本コースでは、ヒトのことばとは何か、どこにあるのか、などの私たちの日常生活ではおおよそまず問題にもならないような基本的な事柄から始めます。それが、ことばを通してヒトのこころ (mind) の構造と性質を解明するという目標に向かって、明示的な理論の構築を目指している生成文法の企てのまさに第一歩だからです。

とはいうものの、やはり少し難しい専門的なことももちろん学びます。まず、今やもうほとんどどこでもあまりやっていないのですが (その意味では相当貴重です)、初期の理論をてがかりに、生成文法の思考法・方法論、基本的概念・仕組みなどについて詳しく学びます。その後、言語獲得の視点を組み入れながら、いわゆる統率・束縛理論についてその主要部分・概念を解説し、それに関わる英語や日本語の具体的分析例について、できるだけ現在の視点を加味しながら考えていきます。また、最近話題のヒトのことばの起源・進化の問題にも触れたいと思います。

なお、授業は講義形式で行います。特定の教科書は使いません。適宜プリント等を配布します。下記以外の基本 (参考) 文献については第 1 回目の授業で、その他の関連参考文献については進度に合わせて授業中に随時、それぞれ、言及・紹介します。

【参考文献】

大津・池内・今西・水光 (編) (2002) 『言語研究入門—生成文法を学ぶ人のために』 (研究社) 大津由紀雄 (編) (2009) 『はじめて学ぶ言語学：ことばの世界を探る 17 章』 (ミネルヴァ書房)

【この課目で前提とされる知識など】

言語学、認知科学、生成文法などに関する予備知識は必要としません。学部学生、院生のみなさん、小中高大の先生方、社会人のみなさんなど広い範囲の方々に受講していただ

きたいと思います。

【プロフィール】

池内 正幸（いけうち・まさゆき）

津田塾大学学芸学部英文学科教授 博士（文学）

生成文法理論（言語理論、統語論）、進化言語学。1976 東京教育大学大学院博士課程単位取得後退学。1989-91 マサチューセッツ工科大学（MIT）言語・哲学科 Fulbright Visiting Scholar. 2007-08 エジンバラ大学言語進化・計算研究ユニット Visiting Scholar. 『明日に架ける生成文法』（共著、開拓社、2005 年）、『ひとのことばの起源と進化』（開拓社、2010 年）、『^{いま}生成言語研究の現在』（共編著、ひつじ書房、2013 年）、『言語の設計・発達・進化 生物言語学探求』（共編著、開拓社、2014 年）など。

② 生成文法Ⅱ 生成文法理論の最近の発展・動向

（月曜日 2 限・午後 7:40 ～ 9:10）前期 <生成文法>

高橋 将一（一橋大学准教授）

【講義概要】

本講義では、生成文法理論における最近の発展及び、動向を概観していきます。まず始めに、近年出版された Chomsky の論文を取り上げ、そこで提唱されている理論的提案・主張を学び、経験的事実に照らし合わせて検討したり、受講生と議論を行なったりすることなどで、それらの提案・主張のより深い理解を目指していきます。具体的には、Chomsky (2013) で提案されている『統語構造のラベルの決定メカニズム』に関して詳論し、ラベルの決定メカニズム及び、それに付随する提案がもたらす理論的・経験的帰結について考えていく予定です。特に、ラベルの決定メカニズムの観点からの successive-cyclic movement などの移動の特性に関する Chomsky の提案に注目し、基本的な主張を理解したうえで、移動で観察される他の現象への発展性を模索していきたいと考えています。さらに、関連する理論的提案を取り扱っている最近の論文も考察していくことを予定しています。また、統語構造の構築に必要な不可欠な操作である『併合』に関しても検討していくことを考えています。併合がどのように行われていくのかという問題を考えるにあたり、Takahashi and Hulsey (2009) の併合に対する一つのアプローチを紹介し、併合の性質とそれがもたらす経験的帰結（移動で観察される reconstruction 効果）を議論していきます。これらのトピックを議論した後、時間が許せば、異なった観点から言語理論を考察していきます。具体的には、統語論を意味とのインターフェイスの視点から検討し、統語論の簡素化や統語現象の原理的な説明の可能性を探究していきます。議論する言語現象の一例として、crossover

の効果を予定しています。また、可能な限り受講生の興味、関心を踏まえながら、取り上げるトピックを考えていきたいと思っています。

【テキスト・参考文献】

テキストは使用しませんが、Chomsky, N. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130:33-49、Takahashi S. and S. Hulsey. 2009. Wholesale late merger: Beyond the A/ $\bar{A}$ distinction. *Linguistic Inquiry* 40:387-426 などの文献を含め、関連する文献については、講義の中で紹介します。

【この課目で前提とされる知識など】

生成文法の入門書の内容程度の知識を前提とします。

【プロフィール】

高橋 将一（たかはし・しょういち）

一橋大学大学院経済学研究科准教授（2015年3月まで。2015年4月より青山学院大学文学部英米文学科准教授〔予定〕。）

統語論、意味論、統語論と意味論のインターフェイス

2006年マサチューセッツ工科大学大学院博士課程言語学・哲学学科修了、Ph. D.

主要論文：The hidden side of clausal complements. *Natural Language & Linguistic Theory* 28:343-380、More than two quantifiers. *Natural Language Semantics* 14:57-101 など。

③ 日本語文法史—動詞の自他とその周辺—

（月曜日2限・午後7：40～9：10）前期 ＜史的言語学＞

川村 大（東京外国語大学教授）

【講義概要】

日本語における文法事実の歴史的変遷と、その（理論的）解釈について講義する。事実の紹介もさることながら、「古代語文法によって、現代語文法あるいは現代語文法をめぐる理論的理解を相対化することの面白さ」について、できるだけ考えてみたい。

今年度は、「解ける—解く」「放れる—放す」「上がる—上げる」「飛ぶ—飛ばす」など、語基を共有する自動詞と他動詞の対、すなわちいわゆる「動詞の自他」について、やや掘り下げて考えてみたい。この領域は、理論言語学や言語類型論からの関心も相まって、近時盛んに論じられているが、古代語の検討をとおして見えてくることも少なくない。具体的には、次のような事項を取り上げる予定である。

- ・「解ける tokeru」を tok+eru、「上がる agaru」を ag+aru、「飛ばす tobasu」 tob+asu などと分析する了解の問題点
- ・上記の分析において得られる「接尾辞」-eru、-aru、-asu などが、それぞれ派生自動詞

あるいは派生他動詞の意味的タイプと一対一に対応すると考える了解の動機とその問題点

- ・自他対応と動詞サセル形、動詞ラレル形との関係
- ・日本語の記述にとって必要な「ヴォイス」理解 など

日本語を専攻する人だけでなく、他動性、ヴォイスといったことに関心のある他言語専攻の人にとっても興味が持てる内容になろう。

【テキスト・参考文献】

教科書は使用せず、ハンドアウトを配布する。参考文献は随時指定する。

主要参考文献：須賀一好・早津恵美子編（1995）『動詞の自他』ひつじ書房、川村大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版

【この課目で前提とされる知識など】

日本語学・言語学の入門程度の知識が必要である。古文の知識は高校で教わる程度で良い。事前に勉強したい人は、日本語史の概説書の「文法史」の章などを読むとよい。

【プロフィール】

川村大（かわむら・ふとし）

東京外国語大学大学院教授

国語学（文法、文法論）。

1990 年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士（文学）。

『ラル形述語文の研究』（くろしお出版、2012）、「動詞ラル形述語文と無意志自動詞述語文との連続・不連続について」（『国語と国文学』89 巻 11 号、2012）「ラレル形述語文における自発と可能——古代語からわかること——」（『日本語学』32 巻 12 号、2013）など。

④ 文法と意味：認知文法の視点

（月曜日 1 限・午後 6：00～7：30）後期 <言語学特殊講義>

西村 義樹（東京大学教授）

講義概要

昨年度に引き続いて R. W. Langacker の認知文法の観点から文法と意味の関係をめぐる諸問題について考察する。（必要があれば、最初の 1、2 回で認知言語学を初めて学ぶ方々のための導入を行う。）認知文法のどこが「認知的」なのか、文法と関わる意味とはどのようなものか、文法カテゴリー（名詞、動詞、それぞれの下位類など）や文法関係（特に主語）に意味的な基盤はあるのか、構文の意味と動詞や形容詞の意味はどのような関係にあ

るのか、比喩（特に隠喩と換喩）と文法の関係とは、などが主題になる予定である。面接および初回の授業で受講者のご意見やご希望を伺った上で、扱う問題を絞り込んで詳しく扱うことも考えている。

講義で使う資料のコピーはこちらで準備する。参考文献は講義の中で適宜紹介する。

【プロフィール】

西村 義樹（にしむら・よしき）

東京大学文学部 言語学教室 教授

認知言語学、意味論、日英語対照研究

1989 年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。

『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）、『認知言語学Ⅰ：事象構造』（編著、東京大学出版会、2002）『言語学の教室』（共著、中公新書、2013）など。

⑤ 言語哲学

（月曜日 2 限・午後 7：40～9：10）後期 ＜言語学特殊講義＞

酒井 智宏（早稲田大学准教授）

【講義概要】

あなたと固い絆で結ばれていたはずのタマが行方不明になり、タマのクローンをプレゼントされたとします。そのクローンは何から何までタマと同じです。あなたはタマクローンをタマと同じように愛することができるのでしょうか。できないでしょう。「これは偽物だ。タマじゃない。」人間の心は「タマと何から何まで同じもの」を「タマと同じもの」とみなすことを拒否します。

あなたと固い絆で結ばれていたはずのタマが行方不明になり、15 年後に変わり果てた姿で戻ってきたとします。15 年前のタマの面影はありません。それでもあなたは 15 年前と変わらずタマを愛するでしょう。「これはまちがいなくタマだ。」人間の心は「かつてのタマと何から何まで違うもの」を「かつてのタマと同じもの」とみなします。

「同じなのに違う。」「違うのに同じ。」このような不合理としか思えない心のはたらきが固有名詞の使用にかかわっています。「同じものは同じ。」「違うものは違う。」合理性だけを追究するならこれでじゅうぶんでしょう。タマがいなくなったら、タマクローンがタマの代理を務める。そういう社会のほうが合理的です。いなくなったタマのことをいつまでも考えて何のメリットがあるのでしょうか。どうやら人間の心は合理性だけでは説明のつかないものを含

んでいて、それが言語を駆動しているようです。その正体はいったい何で、何のために生じたのでしょうか。

この講義では、言語学の教科書が黙って通り過ぎてしまう問題を、あえて立ち止まって考えてみます。昨年度とは異なる題材を取りあげますので、継続して受講する方にとっても、新たに受講する方にとっても、等しく有意義な講義となるでしょう。

【テキスト・参考文献】

教科書は使用せず、ハンドアウトを配布する。参考文献は随時指定する。

【この課目で前提とされる知識など】

予備知識は必要としません。「言語の問題に関する模範解答を知りたい」というより「どうしてこれが模範解答として教科書に載るようになったのだろう」と考えるタイプの方は特にこの講義に向いているでしょう。

【プロフィール】

酒井 智宏（さかい・ともひろ）

早稲田大学文学学術院准教授

言語哲学、意味論、語用論、フランス語学

2003 年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術）

2004 年パリ第 8 大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage

主要著作：『トートロジーの意味を構築する―「意味」のない日常言語の意味論―』（単著 くろしお出版、2012）、『フランス語学小事典』（共著、駿河台出版社、2011）

⑥ 認知言語学Ⅰ 基本的な考え方から日本語への応用まで

（火曜日 1 限・午後 6.00～7.30）通年 ＜認知言語学入門＞

池上嘉彦（東京大学名誉教授）

【講義概要】

＜言語＞は＜人間＞によって使われるもの、したがって、＜言語＞の話者としての＜人間＞を排除し、＜言語＞そのものだけを考慮すればよいとする姿勢は正当とは思えない—こう考えるのは、間違いなく健全な常識であろう。しかし、実際には、言語学では＜話者＞としての＜人間＞が最初から棚上げされ、そのまま棚晒しにされてしまったり、さもなくば高度に理想化された上で究極的には消去されてしまう、あるいは、一連の＜（形式的な）

規則>に還元されてしまう、といった時期があった。一方では、<話者>が<人間>としての<認知> (cognition: おおまかにいえば、あらゆるものから<意味>を読みとる営み) の能力を駆使する<主体性>ある存在として言語を操り、他方では、<言語>にも人間の<認知>の営みの刻印が多く残されている（したがって、完全に<恣意的>な存在ではない）という認識に立つ<認知言語学> (cognitive linguistics) と呼ばれる段階に達するまでには、意外と思えるほど長い時間がかかったという経緯がある。

本講では、<認知言語学>の「初歩」というよりは、その「基本的な考え方」を出来るだけ分かり易い言葉で説明することを試みる。（したがって、一部の専門文献に出てくるようなたぐいの図式的な表記は用いない。）認知言語学の議論でも、学問上の共通語として英語の例が多く登場するが、もちろん英語が人間言語の代表的なものというわけではない。例えば、日本語によるコミュニケーションでは、言語表現そのものの意味を越えて<話者>による認知的な営みの果たす役割が相対的に大きくなる傾向が見られる。認知言語学的なアプローチが日本語と親近性のあることも、ぜひ感じ取って欲しい。

【参考文献】

「入門」と題された書物より、まずは、本多啓『知覚と行為の認知言語学—<私>は自分の外にある』（開拓社、2013）、西村義樹・野矢茂樹『言語学の教室—哲学者と学ぶ認知言語学』（中公新書、2013）といった書物をお奨めする。

【この課目で前提とされる知識など】

特に必要としない。

池上 嘉彦（いけがみ・よしひこ）

東京大学名誉教授、日本認知言語学会名誉会長

東京大学で英語英文学(B. A., M. A.)、Yale 大学大学院で言語学(M. Phil., Ph. D.)を専攻。インディアナ大学、ミュンヘン大学、ベルリン自由大学、チュービンゲン大学、北京日本学研究中心、マサチューセッツ大学(チェコ)などでも客員教授。フボルト財団、ブリティッシュ・カウンシル、フルブライト財団、ロングマン社の研究員として独英米の大学に滞在。著書：『英詩の文法』、『意味論』、『「する」と「なる」の言語学』、『ことばの詩学』、『詩学と文化記号論』、『記号論への招待』、『<英文法>を考える』、『日本語と日本語論』、『自然と文化の記号論』など。

⑦ 日本語文法の諸相

(火曜 2 限・午後 7:40～9:10) 前期 <日本語文法理論>

三宅 知宏 (鶴見大学教授)

【講義概要】

本講義は、次のような方を対象として想定しています。①日本語文法に関して、一般言語学 (言語理論) の基礎としての知識を得たい方、②日本語文法に関して、日本語教育を行う上での知識を得たい方、③日本語文法に関して、専門的な研究を進める上での知識を得たい方、④日本語、特に文法の分野に関して、知的興味を持っている方。

さらに上の①～④については、日本語が母語かどうかを問いません。日本語の母語話者であれば、無意識に知っていることを意識的に知るということを、非母語話者であれば、日本語という言語の特徴を知るということを、本講義は目的とします。

一例をあげます。「太郎が部屋 (から／を) 出た」という文では、移動の起点を“から”“を”のいずれでも標示できますが、「煙が煙突 (から／*を) 出た」という文では、“を”で標示することはできません (“から”は可能)。

本講義では、まずこのような興味深い事実を可能な限り多く、提示します (④向け)。次に、このような事実がどのように一般化され、説明され得るのかについて、解説します (②③向け)。そして、それが、一般言語学の知見 (言語理論) に照らしてどのような意味を持つのか、また他の言語と対照した場合にどのようなことが言えるのか等についても言及します (①向け)。

【テキスト・参考文献】

本講義において、特定のテキストは使用しません。必要に応じて、プリントを配布します。参考文献は、授業中に適宜、紹介します。

【この課目で前提とされる知識など】

本講義は、受講にあたっての特別な知識は必要としません。もちろん、専門的な知識を既に持つ方の受講も拒みません。

【プロフィール】

三宅 知宏 (みやけ・ともひろ)

鶴見大学文学部教授 博士 (文学)

日本語学, 言語学

1997 年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学

『日本語研究のインターフェイス』(くろしお出版, 2011), 『日本語と他言語』(神奈川新聞社, 2007), 他

⑧ 述語とは何か

(火曜 2 限・午後 7:40～9:10) 後期 <日本語文法理論>

尾上 圭介 (東京大学名誉教授)

多くの文 (述定文) は述語を持つ。と言うより、述語で述べることによって文は成り立つ。その直感はある意味で正しい。しかし、「大きな桜!」「おい、お茶」というような、述語を持たずに成立している文 (非述定文) もある。述語を持つ文も持たない文もともに文であるというのはどういうことか。そもそも「述語で述べる」とはどういうことなのか。

「あれは何?」と聞かれて「すいか」と答える時の「すいか」は紛れもなく述語だが、冷蔵庫の中にすいかを見つけて「あ、すいか」と言う時の「すいか」は述語ではない。故障中だと思っていた扇風機の羽根が回るのを見て「あ、回る」と言う時の「回る」は述語なのだろうか。「そこに座る!」と人に命ずる時の「座る」は述語なのであろうか。

「あれは何?」「すいか」の「すいか」は英文法流に言えば主格補語だが、常識的に述語だと言ってよい。また、「すいかです」と答えるところを見ると、「デス」(デアル・ダ) というコピュラ (繫辞。英語では *be*) がこそが述語なのだとすることもできる。どっちが述語なのかと問う前に、名詞述語文にはなぜコピュラが出てくるのか、きちんと考えなくてはならない。

動詞が述語に立つ場合に典型的に見えたとおり (実はすべての文の述語は本質的に動詞であると言える)、述語にはテンス、モダリティというカテゴリーが存立する。なぜそうなのか。その場合、モダリティとは「話者の主観」という意味ではない。(Lyons は *objective epistemic modality* という用語も使っている。)

日本語のいわゆる助動詞 (ヨウ・タ・ナイなど) を含む叙法形式の全体組織や述語外接形式 (ヨウダ・ラシイ・カモシレナイなど) と、述語が表わす文法的意味との関係を正面から深く考察していく。

【テキスト・参考文献】

講義理解のために必要となる文法事実や先行研究は、必要に応じて資料を配りつつ講義の中で説明する。

【この課目で前提とされる知識など】

予備知識は特に必要ない。

【プロフィール】

尾上 圭介 (おのえ・けいすけ)

東京大学名誉教授

大阪市の生まれ。東京大学名誉教授。博士 (文学)。専攻は、日本語学 (文法論・文法史・

意味論) および「大阪のことばと文化」。日本笑い学会理事。東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了。

著書に、『文法と意味Ⅰ』(くろしお出版・2001)、『文法と意味Ⅱ』(同・2014)、『大阪ことば学』(創元社・1999、講談社文庫・2004、岩波現代文庫・2010)、『朝倉日本語講座第6巻・文法Ⅱ』(編著、朝倉書店・2004)、『日本語文法事典』(共編、大修館書店・2014) など。

⑨ 音声学

(水曜日1限・午後6:00~7:30) 通年 <音声学>

上野 善道 (東京大学名誉教授)

【講義概要】

音声を正しく聞き取って書き取り、かつそれを発音できるようにでなければ、未知の言語・方言の研究は一步も進まないと言っても過言ではありません。それだけではなく、英語や日本語などのよく知られている言語でも、音声学を身につけていないと事実をきちんと観察できないものです。また、歴史・比較研究にも音声学の知識が不可欠です。現在、日本語のサ行子音は[s]ではなくなっており、また濁音では声帯の振動開始時間が遅れてきていますが、音声学的素養がないとこれらの変化に気付かないものです。

この講義では、音声の理論的な理解はもとより、実践的な習得をも狙いとし、具体的な目標を「国際音声字母」が使いこなせるようになることに置きます。つまり、「実践音声学」の訓練を行なうので、聞き取りテストと発音練習はほぼ毎時間当てられるものと思ってください。本を読んで頭で理解するだけでは音声学は身に付かないからです。

しかし、難しく考える必要はありません。人間は、何語でも話せるようになる能力をもって生まれてきます。音声に関しても同じで、誰でも、世界中の言語の音声をマスターする力があるのです。これには能力差はありません。柔軟な頭と努力あるのみです。母語の枠に固執しない柔軟な対応と日々の練習が必要です。要は、毎日楽しく実践することです。

【テキスト】

風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2014) 『言語学』第2版第8刷 (東京大学出版会) と服部四郎 (1984) 『音声学』 (岩波書店) を併用します。前者は各自用意のこと。(最新刷が望ましいが、第2版第5刷以降なら可)。後者は面接時に指示します。

【この課目で前提とされる知識など】

予備知識は必要ありません。誰でも分かるように説明します。日々の努力さえあれば十分です。予習よりも復習が重要です。

【プロフィール】

上野 善道（うわの・ぜんどう）

東京大学名誉教授／日本語学会会長，日本音声学会前会長，日本言語学会元会長。

専門は音声学・音韻論・方言学。特に日本語諸方言のアクセント研究。

「フンイキ>フインキの変化から音位転換について考える」『生活語の世界』：8-19（2014），
“Three types of accent kernels in Japanese” *Lingua* 122: 1415-1440，「琉球喜界島方言のアクセント——中南部諸方言の名詞——」『言語研究』142: 45-75，「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1)：44-62（以上2012），『日本語研究の12章』（監修，明治書院，2010），『朝倉日本語講座3 音声・音韻』（編著，朝倉書店，2003）等。

⑩ 社会言語学入門

（水1限・午後6:00～7:30） 通年 <社会言語学>

嶋田 珠巳（明海大学准教授）

【講義概要】

社会言語学の特徴は、実際に使われることばの多様性をとっかかりにして言語の本質に迫るところにあります。実際の言語使用および多様な言語形態がどのようなものであるのか、またそれがどのようにしてうまれるのかを、ひと（話者）、言語コミュニティ、おおきくは社会と文化との関連において明らかにするのが、中心的な研究課題です。

このコースでは、人と言語、言語とコミュニティをめぐるさまざまな事例を検討しながら、社会言語学の考えかたとこれまでの研究成果などについてお話しします。前期は入門編。

(i) 言語学と社会言語学、(ii) バリエーションの言語学（方言、社会的属性と言語）、(iii) 接触の言語学（新言語形成、クレオール、コードスイッチング）、(iv) 社会に活かす言語学（応用言語学、言語教育、言語政策）などをとりあげます。後期は、(v) フィールドの社会言語学（言語知識、話者意識、言語変化）、さらに (vi) 研究論文から学ぶ社会言語学。言語に対するより豊かな理解につなげていきます。

社会言語学は言語を理解するのに重要な手がかりを与えてくれます。なぜAさんとBさんは同じ地域の出身なのに話し方が違うのか、なぜAさんとBさんのことばが違ってきこえるのか。英語はカッコいいのか、面接では標準語を話さないといけないのか、母語の異なる言語話者が複数集まればどんなコミュニケーションがうまれるのだろうか。たとえばこのような身近な問いから始めて、どんどんその深みを探究してみませんか。

【テキスト・参考文献】

特定のテキストは使いません。文献は適宜紹介いたします。

【この課目で前提とされる知識など】

特にありません。

日常生活における言語使用には社会言語学における考察のヒントがたくさん潜んでいます。教室でのディスカッションであらたな知がうまれるかもしれません。

※「社会言語学」は隔年開講課目ですので、来年度は開講を予定していません。

【プロフィール】

嶋田 珠巳（しまだ・たまみ）

明海大学外国語学部准教授。社会言語学、アイルランド英語。2007 年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博士（文学）。山形大学人文学部准教授などを経て、2014 年 4 月より現職。主な著書・論文として、*English in Ireland: Beyond Similarities*, 溪水社 2010 年、“Diffusion vs. independent emergence of the *do be* habitual: Exploring linguistic connections between Ireland and the eastern Caribbean”. *Transcultural Roots Uprising: The Rhizomatic Languages, Literatures and Cultures of the Caribbean*. University of Curaçao, 2013 年、“The *do be* form in southwest Hiberno-English and its linguistic enquiries”『東京大学言語学論集』第 33 号熊本裕先生退職記念号, 2013 年などがある。

⑪ 言語学入門

（水曜日 2 限・午後 7:40 ～9:10 ）通年 ＜言語学入門＞

大津 由紀雄（明海大学教授・慶應義塾大学名誉教授）

【講義概要】

「言語学」と聞いて、どんな学問を連想しますか。「言語」学というのですから、「言語」を対象にした学問であろうことはだれでも推測できますが、それ以上、立ち入った話になると、案内書なり、案内人が必要になるでしょう。

想定している受講者は、学部生、大学院生、小中高の先生、一般社会人、そして、（夜は遅いのですが）高校生です。

日本社会の将来を考えると、ことばの問題を無視することはできません。ことばは思考とさまざまな形での情報交換を支える重要なシステムだからです。しかし、いまの日本にはことばに関する俗説が横行し、ことばの教育もないがしろにされがちです。こうした状況の改善は喫緊の社会的課題です。その意味で、この講義を、言語学を学びたい、言語学の研究者を目指したいというかたがただけでなく、広くことばに関心を持つかたがたに受講していただきたいと願っています。

取り上げる予定のトピックはつぎのとおりです。「言語」とは。なぜ言語を研究するのか。

研究の方法。動物の「言語」とヒトの言語。言語音の世界。語の世界。文の世界。語用の世界。形と意味。言語の獲得。言語理解。発話。言語の変化。言語と社会。言語の脳科学。言語の起源と進化。言語と教育。など。

なお、同じ水曜日1限に開講される「社会言語学（社会言語学入門）」を同時受講するのも効果的だと思います。

ことばは人間だけに許された宝物です。その正体を探ることによって、その価値をきちんと認識し、効果的に活用することができるようになります。この機会に言語学への入門を果たしてください。

【この課目で前提とされる知識など】

ありません。

【テキスト・参考文献】

教科書は使いません。必要に応じて、教材をコピー、ないしは、電子メールへの添付書類の形で配布します。

【プロフィール】

大津 由紀雄（おおつ・ゆきお）

明海大学教授・慶應義塾大学名誉教授

言語の認知科学（生成文法・言語獲得・統語解析）。1981年マサチューセッツ工科大学(MIT)大学院博士課程言語学・哲学研究科修了、Ph.D.『言語の獲得と喪失』（共著、岩波書店、2005年）、『ことばに魅せられて 対話篇』（ひつじ書房、2008年）、『はじめて学ぶ言語学――ことばの世界を探る17章』（編著、ミネルヴァ書房、2009年）など。

⑫ 日本語音韻論

（木曜日1限・午後6：00～7：30）前期 ＜音韻論＞

窪 蘭 晴夫（国立国語研究所教授）

【講義概要】

今年度の講義では日本語のアクセントに関する種々の問題を考察する。東京方言については、様々なタイプの語（豆屋-煮豆屋、飲み物-巻物、日文研-国語研、コンドロイチン-アドレナリン等）を題材に、アクセント核の有無（起伏式・平板式）を決定する要因を分析する。特に着目したいのが、(i)平板式の生起が語長（モーラ数）や音節構造、構成要素のアクセント、連濁などとどのように関係しているか、(ii)その関係に何か一般性が見

いだせるか、という2点である。また方言のアクセントについては、音節とモーラがアクセントとどのように関わっているかという問題と、標準語との接触によって方言アクセントがどのように変化してきているかという問題を方言比較の観点から考察する。できるだけ日本語以外の言語にも目配りして、日本語の研究が一般言語学にどのように貢献できるかということも考察したい。

【テキスト】

データの収集と分析を中心に講義を進めるが、必要に応じて関連する論文を読む（事前にPDFで配布する）。

【参考文献】

窪菌晴夫著『アクセントの法則』（岩波書店、2006）。他の文献については講義の中で適宜、追加紹介する。

【この課目で前提とされる知識など】

言語学の基礎知識があれば、音韻論の専門知識は必須ではない。日本語以外の言語を専門とする人や日本語教師、英語教師の受講も歓迎する。

【プロフィール】

窪菌 晴夫（くぼぞの・はるお）

国立国語研究所 理論・構造研究系教授。

音韻論、音声学。

1986年英国エジンバラ大学大学院（言語学）修了，Ph.D.（1988年）。*The Organization of Japanese Prosody*（くろしお出版，1993）、『語形成と音韻構造』（くろしお出版，1995）、『日本語の音声』（岩波書店，1999）、『アクセントの法則』（岩波書店，2006）、『数字とことばの不思議な話』（岩波書店，2011）など。

⑬ 文法形式の多義性

（木曜日2限・午後7:40～9:10）前期 <意味論>

尾上 圭介（東京大学名誉教授）

日本語の「ねこ」という語は、大ざっぱに言えば英語では **cat** と置き換えれば済む。名詞や動詞などの実質語は相手の言語に対応する語を見つけて置き換えればほぼ意味は伝わる。けれども「ラレル」とか「モ」というような機能語となると、そうは行かない。外国語学習のむずかしさの根源は、一つの文法形式（機能語など）の多義のあり方が言語によって違うことにある。

ラレルは受身という意味を表すことがあり、この意味は英語では be +過去分詞 で表される。しかし言うまでもなく、ラレルの他の意味、可能や自発などは英語の be +過去分詞 では表せない。一方、英語の過去分詞は受身のほかに完了の意味を表すのにも使われるが、完了の意味は日本語でラレルでは表せない。加えて、日本語では「太郎は母親に早く死なれた」というような自動詞の受身もあり、ラレルで言えるが、英語ではそんな受身表現はあり得ない。ラレルがこのような多義性を有するのはなぜか。ラレルが表現する受身というものが英語の受身と比べて異なる面があるのはなぜか。

～テイルという述語形式を英語に訳そうとすれば、ほぼ半分は現在進行形になり、ほぼ半分は現在完了になる。なぜそんなことが起こるのか。テイルの多義性はどのような論理で発生するのか。

モが並列という意味を表す用法については、どこの言語にもそういう意味を表す副詞や助詞があり、置き換えれば済むかに見えるが、

「心配で夜も寝られない」「風もないのにはらはらと散る」「足音も高くかけ込んできた」のモなどは、いわゆる並列の意味とは関係ないように見えるし、外国語に訳しにくい。モの多義性はどのようにして生ずるのか。

そういう観点から、文法形式の意味というものを考えていきたい。

【テキスト・参考文献】

講義内容の要旨・レジュメと、参考文献のコピーを適宜配布する。

【この課目で前提とされる知識など】

ことばの意味について考えることが好きな人であれば、予備知識は特に必要ない。

⑭ P29

認知言語学Ⅱ ー認知言語学＜再＞入門ー

(金曜日 1限・午後 6:00 ～7:30) 前期 <認知言語学>

大堀 壽夫 (東京大学教授)

私たちは物質的な世界だけでなく、こころが創り出した世界に生きています。ことばを切り口として、こころの世界を探ろうとする試みが認知言語学です。この講義では、この分野のさらなる展開に関心をもつ人たちと主な対象として、認知言語学の基本概念について検討し、理論の改訂と具体的な応用の可能性を探ります。そうした作業を通じて、「応用認知言語学」といったものが存在するなら、どのような姿になるかを考えていきたいと思えます。

最初の数回は主に背景と主要概念の確認を行います。必要に応じて重要な原典の抜粋も読みながら、二次的な解説書に頼り過ぎない理解を目指します。それに続いて、(1) 意味の創造的側面としての比喩表現（メディアの言語や翻訳を含む）、(2) コーパスを利用した意味分析（特に、学習者用辞典の記述方法に目を向ける予定）、(3) 比較文化的な話題（特に、**motion** と **emotion** の関係など、感情表現に目を向ける予定）を取り上げて考えていきます。随時、講義とともに論文の講読も行います。

【テキスト】

なし。必要に応じてプリント使用。

【参考文献】

認知言語学の考え方を対話形式で説いた本として、西村義樹・野矢茂樹『言語学の教室--哲学者と学ぶ認知言語学』（2013、中公新書）、中級以上の概説書として、大堀壽夫『認知言語学』（2002、東京大学出版）、松本曜（編）『認知意味論』（2003、研究社）、J.R. テイラー『認知言語学のための 14 章』（改訂版 2008、紀伊国屋出版）、用語解説として辻幸夫（編）『新編・認知言語学キーワード事典』（2013、研究社）があります。授業の最初に文献表を配布します。

【この課目で前提とされる知識など】

認知言語学に接したことがあれば授業はフォローしやすいと思いますが、特定の授業を既にとっていないと受講できないということはありません。ことばに関心のある方ならどんな人でも歓迎です。専門的な用語は随時解説しますので、なじみのない言い方が出てきたときには手を挙げてきいてみることをすすめます。

【プロフィール】

大堀 壽夫（おおほり・としお）Ph.D. (UC Berkeley, 1992)。専攻は意味論、機能的類型論、談話分析、英語、日本語。特に接続構造の類型と文法化に関心をもっています。日本語による著書・編著：『認知言語学』（2002）、『認知コミュニケーション論』（編、2004）。共訳書：M. トマセロ『心とことばの起源を探る--文化と認知』（2006）、L. ウェイリー『言語類型論入門』（2006）、C. フリス『心をつくる--脳が生み出す心の世界』（2009）、M. トマセロ『機能・認知言語学--言語構造への 10 のアプローチ』（2011）。

<http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~tohori>

⑮ 文法原論

最近数年間の理論言語学研究の実質的な部分を整理、吸収しつつ、動的文法理論の構築を進める。経験的基盤の一部として、個別言語研究、言語類型論、通時言語学、発達言語心理学、神経言語学などの成果を援用する。本年度も引き続き以下の諸点に比較的多くの時間をあてる予定。(1) 言語類型論からの豊富な資料を真に活用するためには、静態的・出力説的な一般文法理論に代えて、動態的・過程説的な一般文法理論が必要になることを示す。(2) 即座の行動を規定するオンラインの情報処理と、長期記憶の形成につながるオフラインの情報処理が、文法の構造にそれぞれどのように反映しているか、動的な視点から考察する。認知心理学、比較動物学からの示唆も参考にする。(3) 述語構造、論理構造、情報構造、発話行為の四者が統語形式への写像においてどのように影響し合い、どのような言語間のヴァリエーションをもたらすか、その動態の解明を進める。(4) 「部分から全体へ」と「全体から部分へ」、「末端から中央へ」と「中央から末端へ」という二系列の、それぞれ両方向性の情報の流れを、矛盾なく、しかも生成能力の過不足なく統合するには、どのような言語モデルが必要か。そして静態的・出力説的な一般文法理論の枠内でそのようなモデルを想定することは可能か。

【テキスト・参考文献】

参考文献については講義中に紹介する。

【この課目で前提とされる知識など】

授業は講義形式。「生成文法入門」程度の予備知識が望ましいが、トピックごとに基礎を簡単に

復習してから話を進めるので、入門未修者も（面接ガイダンスのうえ）受講可。

【プロフィール】

梶田 優（かじた・まさる）

上智大学名誉教授

英語学、言語学

1967 年プリンストン大学 Ph. D. (言語学)。東京教育大学、東京学芸大学、上智大学で英語学、言語学を担当。『文法論Ⅱ』（共著、大修館、1974）、「生成文法の思考法(1)－(48)」(『英語青年』，研究社、1977-1981) など。

(金曜日 1限・午後 7:40～9:10) 通年 <言語学特殊研究>

梶田 優 (上智大学名誉教授)

⑩ 発話解釈のメカニズム

(金曜日 2限・午後 7:40～9:10) 通年 <語用論>

西山 佑司 (慶應義塾大学名誉教授・明海大学名誉教授)

【講義概要】

私たちは、言葉を用いて他人とコミュニケーションをしているが、それが一体なぜ可能であるかという問いに理論的に答えることはそれほど容易ではない。もちろん、「聞き手は、発話で用いられている言語表現の意味を知っているからだ」では答えとして十分ではない。一般に、発話で用いられる言語表現の意味は、話し手が相手に伝えようとするメッセージという観点からすればきわめて不完全で断片的である。話し手がそのような不完全で断片的な言語表現を用いているにもかかわらず、なぜ、聞き手は話し手の意図したメッセージを瞬時に把握できるのであろうか。それは考えみれば実に不思議なことであるが、最近の研究は、そこには、人間だけに可能な「発話解釈メカニズム」が潜んでいることを明らかにした。

この講義では、現代の認知語用論 (cognitive pragmatics) として注目されている関連性理論 (Relevance Theory) の立場から、このような発話解釈メカニズムの中身を説明する。とくに、(i) 文の意味と発話の意味との違いは何か、(ii) 話し手が明示的に言っている内容と、暗黙のうちに示唆している「含み」との違いは何か、(iii) 発話解釈におけるコンテキストとはそもそも何か、(iv) アイロニーやメタファーが分かるとはどういうことか、(v) 発話解釈能力と言語能力 (文法能力) との関係は何か、(vi) 発話解釈能力は他人の心を読む能力 (mind reading ability) といかにかかわるか、といった問題を具体例で検討する。本講義を通して、意味論 (semantics) と語用論 (pragmatics) の区別を正しく理解していただく。

【テキスト】

当方でプリントを用意する。

【参考書】

今井邦彦・西山佑司共著『ことばの意味とはなんだろう ― 意味論と語用論の役割 ―』(岩波書店、2012 年)

【この課目で前提とされる知識など】

意味論や語用論についての予備知識は必要としない。言葉の意味や解釈に関心をもち、知的創造の喜びを体験したいと思う受講生を歓迎する。言語データを広く見ると同時に

論理的に考える態度が要求される。

【プロフィール】

西山 佑司（にしやま・ゆうじ）

慶應義塾大学名誉教授・明海大学名誉教授

意味理論、語用理論、コミュニケーション理論、言語哲学。1974 年マサチューセッツ工科大学(MIT)大学院博士課程哲学科修了、Ph. D. 『意味論』（共著、大修館書店、1983 年）、『日本語名詞句の意味論と語用論』（ひつじ書房、2003 年）、『談話と文脈』（共著、岩波書店、2004 年）『ことばの意味とはなんだろう』（共著、岩波書店、2012 年）、『名詞句の世界』（ひつじ書房、2013 年）。

⑪ 認知言語学演習

（火曜日 2 限・午後 7.40～9.10 ） 通年

池上 嘉彦（東京大学名誉教授）

修士・博士論文（あるいは、それに準じるもの）、ないしは、国内、国外の刊行物への寄稿などを目指して準備中、あるいは、執筆中の人を対象に、議論の相手、参考文献の紹介や講読などを通して問題についての認識を深めることを意図するクラス。（現に大学院に在学し、そこで特定の指導教官から十分な指導と助言を受けうる立場にいるような人は除く。想定しているのは、例えば、満期退学になって、その後、多かれ少なかれ独力で論文作成と取り組まなくてはならない人。）

テーマについては、広い意味で認知言語学に関わるもの。ただし、演習担当者の好みからして、詩学(Jakobson のことばで、‘What makes a verbal message a work of art?’ という課題との取り組み)や文化記号論にまたがるものでもよい。（もちろん、逆に認知言語学の枠内なら、どのようなテーマでも引き受けられるわけではない。）

参加者には、他の参加者の専門的なテーマにも自分なりに興味が持てるだけの関心の広さと好奇心を期待する。人数は 3 名。初めての参加希望者優先。提出された研究計画書（および、必要な場合は、さらにそれについての面接）によって決定。

※2 名以下の場合は実施しない。